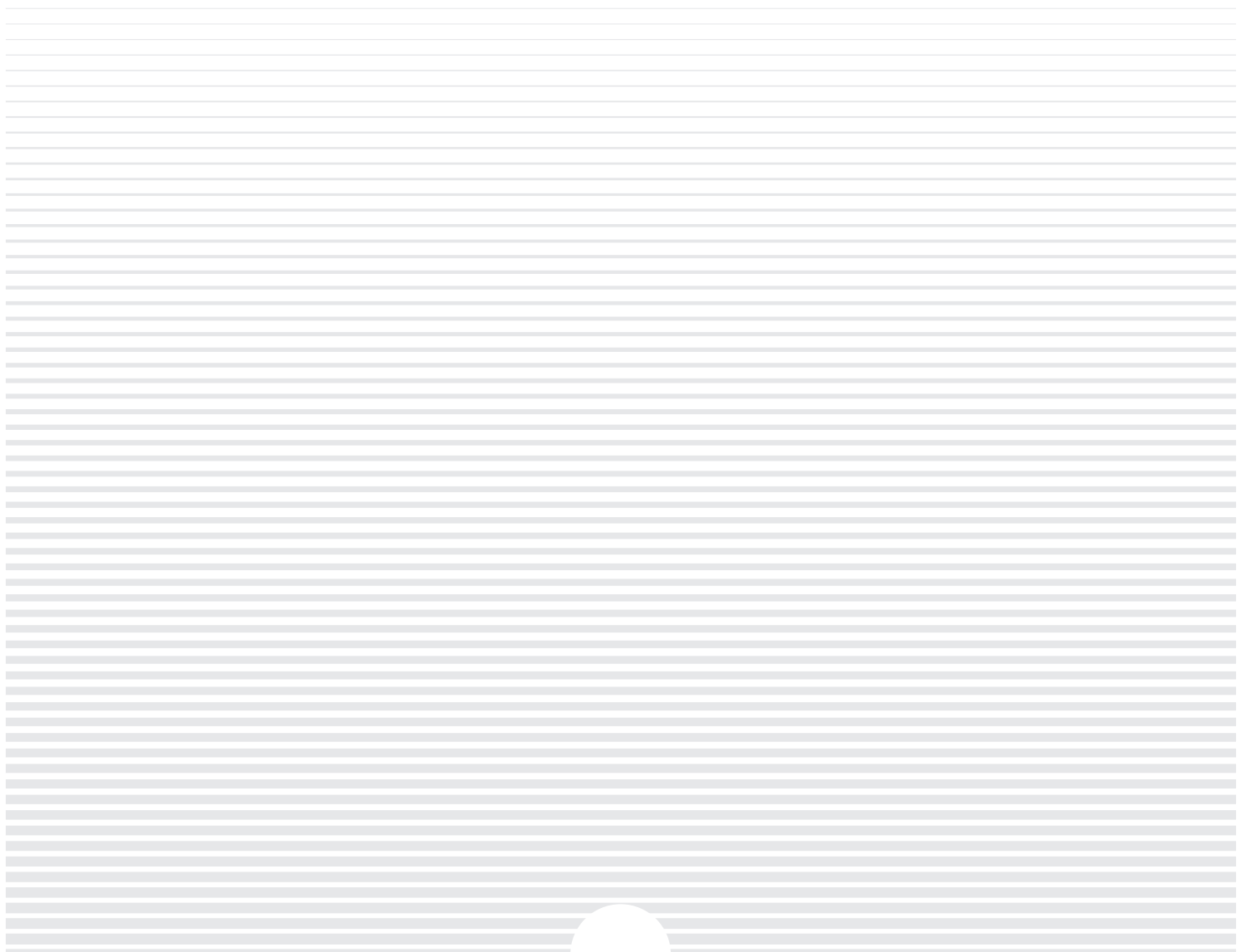


# 3.2

## 教育体制・産業界ニーズ 把握体制の整備・連携推進





## 3. 2 教育体制・産業界ニーズ把握体制整備と連携推進

### (1) 教育体制・産業界ニーズ把握体制整備

#### ●教育体制整備

教育体制整備については、全学組織をあげての「科のあり方検討委員会」を立ち上げ、カリキュラムの大枠から詳細な開講科目に至るまで詳細に検討した。

3つのポリシーを明確に示すために、建学の精神・教育理念、教育の目的・目標、学修成果、教育課程・教育プログラムの相互の関係を見直した。その際、カリキュラムマップを整備した。

その結果に基づき、平成26年度からカリキュラム改訂を実施する。

カリキュラム検討の際には、地元の有力企業・組織を訪問し、本学の卒業生に対するニーズについてヒアリングを実施し、その結果をカリキュラム改訂に反映させている。

産業ニーズを把握するやり方は次項に詳述するが、例年5月以降に、本学卒業生を採用してくれた企業をキャリアセンター教職員が訪問し、卒業生の状況を聞くようにしている。この訪問結果を、本学の社会人基礎力養成に活かす仕組みを強化しつつある。

#### ●産業界ニーズ把握体制整備

本科の教育改革の参考とするため、平成24年度に引き続き平成25年度も地元の企業・金融機関・病院等を訪問し、卒業生に対するニーズ調査を実施した。教育改革に向けての示唆は、一言に集約すれば、学生の「人間としての魅力」をどう磨くかということであった。産業界が求めるものは、コミュニケーション能力や、物事に取り組む姿勢、やる気、我慢強さなど、まさに「社会人基礎力」に代表される資質であることを確認できた。

世間に公表されているどのアンケート結果でも、産業界が求める能力は、「コミュニケーション能力」が圧倒的にトップである。連携幹事校の三重大学の「育成すべき資質」に関するアンケート結果でも、企業の要求が強い割には教員の意識にのぼっていない資質として、「行動力」と「コミュニケーション能力」が挙げられていた。

コミュニケーション能力というと、討論や発表、文章作成などのスキルを問題にしているように思われがちだが、そのような狭い分野だけの力を問題にしているわけではないと思われる。論理的な思考無しには、討論や発表で相手を説得できるものではないからである。何よりコミュニケーションは双方向である。相手に自分の考えをわかりやすく伝える発信力や説得力も重要だが、いま話題になっている、相手の意見を丁寧に聴く傾聴力や、意見や立場の違いを受け入れる柔軟性や臨機応変な対応ができなければ他者との円滑なコミュニケーションは成立しない。会社組織のような集団で行動していくには、自分と周囲との状況を把握する状況把握力も必要となる。

大学へのニーズとしては、一般論として、高校生・保護者は「大学に学歴と資格取得支援、その結果としての就職」を求め、大学教員は「やせ細っていく教養教育と専門教育」で対応し、産業界は「社会人基礎力で象徴的に表されるような人間的成長」を求めている。

産業界ニーズについては、ある程度把握できているわけだが、卒業生の就業状況を知るために今後も継続して企業訪問を実施することになっている。

## (2) 連携事業を反映した体制整備

### 1. 取組内容

連携 23 大学、とりわけ東海 A (教育力) チームでの連携を密に推進し、連携活動で得られた知見を上記の体制整備に活かしている。具体的には、東海 A (教育力) チーム会議での情報交換が基本であり、それに加え、チームに属する各大学がシンポジウムを開催したり、年に 1 回の割りで中部圏産学連携会議を持ち議論を深めている。問題意識が共通しているので、連携事業から学ぶことは多い。

### 2. 活動成果

平成 25 年度に実施した他大学との連携活動は、以下の通りである。「社会人基礎力」育成が共通課題であり、教育力改革を進めるために、指導方法、その評価方法、評価を活かす改善方法について意見交換できていることは大いに意義あることである。

#### 《主な行事》

教員が連携事業に参加したり、本学が主催した行事を時系列で列挙する。

- |              |  |
|--------------|--|
| 4 月 26 日 (金) | 第 1 回 東海 A (教育力) チーム会議<br>会場：名古屋商科大学大学院 伏見キャンパス E22 教室<br>内容：平成 25 年度の連携事業計画、検討課題を議論   |
| 5 月 18 日 (土) | 失敗分析ワークショップ 「教育改革の壁を破るチャレンジ」<br>ー失敗分析をステップに創造的克服を形成するー<br>会場：椋山女学園大学 星ヶ丘キャンパス椋山人間交流会館 1F 会議室<br>内容：中部圏の 23 大学が参加し、失敗事例を分析して対応法を知識化                         |
| 5 月 23 日 (木) | 第 2 回 東海 A (教育力) チーム会議<br>会場：名古屋商科大学大学院 伏見キャンパス E22 教室<br>内容：連携 FD 合宿研修の計画、チームのホームページについて議論  |
| 6 月 07 日 (金) | 本学主催 第 1 回 教育力向上研修会 「教育力改革フォーラム」<br>会場：豊橋創造大学短期大学部 E 棟<br>内容：名古屋商科大学の事例紹介<br>「PROG を用いた教育効果測定と授業改善への活用」<br>参加者：来賓 7 名、本学 32 名                              |
| 8 月 21 日 (水) | 中部&中四国 6 短大 「短期大学連携」第 1 回会議<br>会場：東海大学短期大学部 (静岡市)<br>内容：<br>1. 短期大学における「アクティブラーニング」の現状と課題<br>2. 短期大学における「インターンシップ」の現状と課題<br>3. 短期大学における「社会人基礎力」の成果目標・測定・評価 |

参加：金城大学短期大学部 愛知大学短期大学部 鈴峯短期大学  
静岡英和学院大学短期大学部 東海大学短期大学部 本学

- 8月26／（月） 東海 A（教育力）チーム 連携 FD 合宿研修  
～ 8月27日（火） 会場：公立学校共済組合 蒲郡荘（愛知県蒲郡市）  
内容：教育力チーム各校のアクティブラーニングの位置付け  
※6月～8月の東海 A（教育力）チーム会議の代わりに実施した。
- 9月03日（火） 平成 25 年度 教育改革 ICT 戦略大会  
～ 9月05日（木） 会場：アルカディア市ヶ谷（東京、私学会館）  
内容：大学教育の質的転換への行動
- 9月10日（火） 三重大学 シンポジウム「社会のニーズに対応した教育改革に向けて」  
会場：三重大学講堂小ホール  
内容：基調講演「社会のニーズに対応した大学教育改革の全国的展開」  
パネルディスカッション「社会のニーズに対応した教育改革の課題」  
※シンポジウムの報告を兼ね、東海 A チーム [教育力強化] News Letter  
No1 Nov. 2013 を発行した。
- 10月02日（水） 中部大学 産業界ニーズ事業 特別セミナー  
会場：中部大学 55 号館  
内容：企業経営者からみたリスク管理
- 10月24日（木） 第 3 回 東海 A（教育力）チーム会議  
会場：名古屋商科大学大学院 伏見キャンパス E22 教室  
内容：11月14日開催予定の中部圏産学連携会議への対応
- 10月28日（月） 本学主催 第 2 回 教育力向上研修会  
会場：豊橋創造大学短期大学部 E 棟  
内容：プロジェクト活動に伴う課題の共有と解決策に関する意見交換  
※4つの教育事業のアクティブラーニングの箇所では報告してある。
- 11月14日（木） 平成 25 年度 第 1 回 中部圏産学連携会議  
会場：名古屋会議室（プライムセントラルタワー13階）  
内容：基調講演「産学連携による人材育成に向けて」  
分科会（アクティブラーニング、インターンシップ、組織、評価）  
全体会（産業界からのコメント、全体ディスカッション）
- 11月28日（木） 「産学協同就業力育成シンポジウム 2013」  
主体性が学生を変える、学生が社会を変える

～広がる 学生の本気を引き出す Future Skills Project の挑戦～

会場：明治大学アカデミーコモン内アカデミーホール

内容：研究報告、会場と FSP メンバーとのインタラクティブセッション

1月31日（金）

名古屋商科大学 シンポジウム

会場：名古屋商科大学大学院 伏見キャンパス E31 ホール

内容：産業界ニーズに対応した初年次教育のチャレンジ

～名古屋商科大学を事例とした検討～

2月06日（木）

第4回 東海 A（教育力）チーム会議

会場：名古屋商科大学大学院 伏見キャンパス E22 教室

内容：アクティブラーニングの評価法について

3月08日（土）

「大学教育改革フォーラム in 東海 2014」

会場：名古屋大学東山キャンパス IB 電子情報館、ES 総合館

内容：基調講演「勉強ができる人間は立派か？大学教育が目指すべき人間像」

ポスターセッションとオーラルセッション

### 3. 今後の課題点

平成 26 年度は、本事業の完成年度である。東海 A（教育力）チームとしてアクティブラーニングを評価するための共通指標・効果測定をどうするのか議論を進める。

平成 24 年度は、連携のための手法として「失敗学」を活かすことが前面に出ていたが、「失敗」という言葉自体の印象の悪さのためか、平成 25 年度以降、本来の意図が広く理解されないまま「チャレンジすべき課題」という無難な言葉に後退することになった。本学は、「失敗」する意義を大いに認め、それをどう活かすかに拘り、プロセス全体を紹介する失敗事例についても広く学外へ公開する覚悟である。